開催要綱

細見美術館

光琳を慕う

KÔRIN

中村芳中

HÔCHU

琳派展 XVI

中村芳中 扇面画帖より　細見美術館蔵

中村芳中 花卉図画帖より　細見美術館蔵

平成26年 5月24日[土]

～6月29日[日]

http://www.emuseum.or.jp

琳派展ＸＶＩ

光琳を慕う―中村芳中

平成26年 5月24日(土)～6月29日(日)

前期：5月24日（土）～6月8日（日）　後期：6月10日（火）～6月29日（日）

中村芳中（?～1819）は、江戸時代後期に大坂を中心に活動した画家です。最初は文人画風の山水画や、筆以外のものを用いて描く「指頭画」を描きますが、尾形光琳（1658～1716）の絵に傾倒し、たらし込みと呼ばれる琳派が好んで用いた墨や絵具の滲みやぼかしを活かした技法を駆使した作品を描くようになります。

江戸へ下った芳中は、享和2年（1802）に『光琳画譜』を出版します。江戸琳派の祖とされる酒井抱一（1761～1828）が琳派風の作品を描き始めるのとほぼ同時期のことでした。これをきっかけに芳中は、「光琳風の画家」として活動の幅を広げ、琳派風の作品を多く遺しました。そのほのぼのとした、おおらかな作風は、近年注目を集めるようになっています。

このたび当館では、琳派展の第16弾として「光琳を慕う―中村芳中」を開催いたします。本展覧会では、芳中の初期作である指頭画や山水画、芳中が光琳風の画家と評される契機となった『光琳画譜』、独特なたらし込みを駆使して描いた草花図扇面、芳中が愛した俳諧にちなんだ絵画など、これまでにない規模で芳中の作品をご覧いただける内容となります。

なお、この展覧会は千葉市美術館（2014年4月8日～5月11日）、岡山県立美術館（2014年9月26日～11月3日）を巡回します。

琳派展ＸＶＩ

光琳を慕う―中村芳中

平成26年 5月24日(土)～6月29日(日)

前期：5月24日（土）～6月8日（日）　後期：6月10日（火）～6月29日（日）

主　催	細見美術館　読売新聞社　美術館連絡協議会
協　賛	ライオン　清水建設　大日本印刷 損保ジャパン・日本興亜損保
開館時間	午前10時～午後6時（入館は5時30分前まで）
休館日	毎週月曜日（祝日の場合、翌火曜日）
入館料	一般1,100円（1,000円）　学生800円（700円） ※（ ）内は20名以上の団体料金
会　場	細見美術館　京都市左京区岡崎最勝寺町6-3 http://www.emuseum.or.jp

お問合せ先　展覧会担当者　主任学芸員　福井麻純
広報担当　三宅　由紀
E-MAIL/ kouhou@emuseum.or.jp
TEL/ 075-752-5555
FAX/ 075-752-5955

展示構成

1 芳中が慕った光琳―尾形光琳とその後の絵師たち

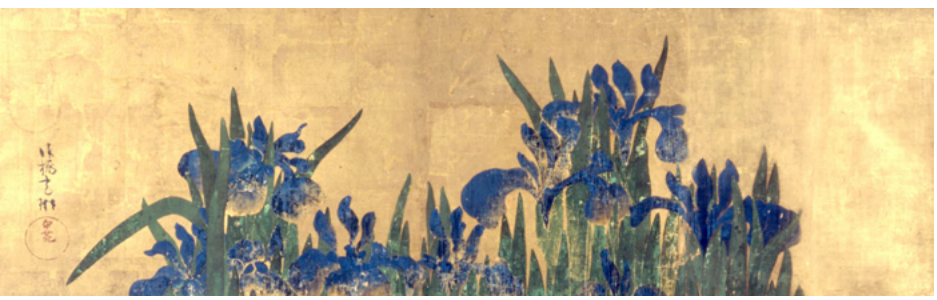
江戸中期に装飾的な作風を展開した尾形光琳（1658～1716）は、高級呉服商・雁金屋の二男として京に生まれた。着物の意匠に接して磨かれた美意識は、絵画にとどまらず、工芸の意匠制作にも及んでいる。光琳は、明快な色遣い、構図の妙、モティーフの単純化、ユーモラスな表情で描くといった作風を確立させ、その名は没後も大きな影響力を持つことになる。

光琳の弟であった乾山（1663～1743）は、特に陶芸の分野で活躍し、兄との共作も行い、華やかな中にも親しみやすい作風で注目された。そのほか、光琳に直接師事したとされる深江芦舟（1699～1757）、光琳に影響を受け、乾山作品の絵付けもした渡辺始興（1683～1755）、江戸で乾山に師事し、光琳の印章を譲り受けた立林何帛（たてばやしかげい）（生没年不詳）など、光琳に連なる画家たちの作品には、光琳の特質を受け継ぎつつも、それぞれの表現で光琳を慕う様子がうかがえる。

主な作品

尾形光琳　燕子花図　1幅　大阪市立美術館
尾形光琳　竹虎図　1幅　京都国立博物館
尾形光琳　重要文化財 小西家旧蔵資料「燕子花図」ほか8枚　京都国立博物館
渡辺始興　寿老鹿鶴図　1幅　細見美術館
立林何帛　扇面貼交屏風　2曲1双　千葉市美術館

尾形光琳　竹虎図　京都国立博物館


尾形光琳　燕子花図　大阪市立美術館

渡辺始興　寿老鹿鶴図　細見美術館

※会期中、展示替があります。

2 芳中の世界―親しみを招くほのぼの画

中村芳中は、意匠家として高く評価されていた光琳に共感、単純化した草花などを描いて光琳風の絵師として注目された。また、俵屋宗達（生没年不詳）らが得意とした「たらし込み」と呼ばれる、墨や絵具の滲みやぼかしを利用した技法を好み、これを強調しておおらかな画風を展開、芳中独特の光琳風を作り上げた。

光琳風を手掛ける以前、芳中は「指頭画」という、筆以外のものを利用して描く画家として名を馳せ、その腕を披露しては人々の眼を楽しませていた。当時の関西の文化人の間で流行していた文人画の手法を習得し、山水画も描いている。

また、人物や動物をユーモラスに描くのも芳中の特徴である。俳諧を愛した芳中は、おもしろい主題を求め、人々の好みや流行にも敏感であったろう。芳中の柔軟な感性は、ほのぼのとした愛らしい表情の人物や、おもわず微笑んでしまうようなかわいらしい動物の絵にも表れている。

主な作品

中村芳中　白梅小禽図屏風　6曲1隻　細見美術館
中村芳中　扇面貼交屏風　2曲1双　細見美術館
中村芳中　花卉図画帖　1帖　細見美術館
中村芳中　白梅図　1幅　千葉市美術館
中村芳中　群鶴図　1幅　個人蔵
中村芳中　山水図　1幅　個人蔵
中村芳中　托鉢図　1幅　個人蔵

中村芳中　白梅図　千葉市美術館

中村芳中　托鉢図　個人蔵

中村芳中　花卉図画帖（七月 芥子）
細見美術館

中村芳中　白梅小禽図屏風　細見美術館

※会期中、展示替があります。

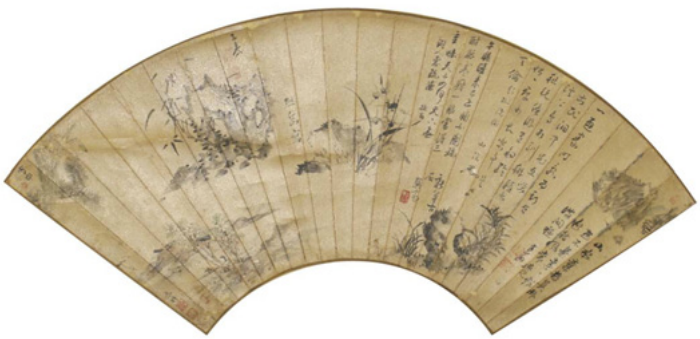
3 芳中のいた大坂画壇

中村芳中の存在が表れる最も早い資料は、大坂の人名録、寛政2年（1790）版『浪華郷友録』である。途中一時大坂へも戻りつつ、寛政11年から文化2年（1805）にかけて芳中は江戸にいた。その後は大坂で活動し、文化4年刊「浪華画人組合三幅対」、文化6年刊「浪華画家見立角力組合二幅対」に登場する。

本章では芳中が大坂画壇の画家たちと合作した作品や、当時流行した書画帖の作品を取り上げる。「大坂文人合作扇面」などで合作した木村兼葭堂、福原五岳、岡熊嶽、松本奉時、森周峯といった大坂の画人の作品も紹介する。『兼葭堂日記』で芳中と同席の多い十時梅厓、芳中の紹介で兼葭堂を訪ねる青木木米についても紹介する。

主な作品

中村芳中ほか　大坂文人合作扇面　1幅　関西大学図書館
中村芳中　『諸家書画帖』より　1枚　個人蔵
中村芳中　『楽翁画帖』より　1枚　公益財団法人 平野美術館
木村兼葭堂　墨蘭図　1幅　個人蔵
松本奉時　『雲烟帖』　1帖　個人蔵



中村芳中ほか　大坂文人合作扇面　関西大学図書館

木村兼葭堂　墨蘭図　個人蔵

※会期中、展示替があります。

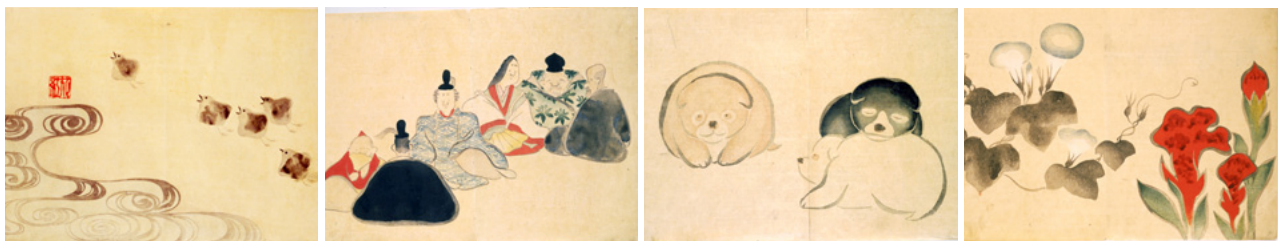
4 芳中と版本 ―版で伝わる光琳風―

芳中は江戸で享和2年(1802)に『光琳画譜』を出版する。芳中について、加藤千蔭の序文は光琳風を学んだ芳中と言い、川上不白の跋文は光琳流を伝える難波人と記す。たらし込みを版で再現しようとした『光琳画譜』によって、光琳風の画人芳中が確立した。江戸ではこのころすでに酒井抱一が光琳風を学んだ絵を描いている。芳中、抱一が光琳の画風を慕う以前、「光琳」は文様、図案としても享受されていた。

芳中は俳諧を嗜み、俳諧のネットワークを頼って江戸へ向かった。挿図と自作の句が載る長斎の『山陰集』、巣兆『徳万歳』等、挿図を手がけた俳書がある。その他、狂歌本にも挿図を寄せている。

主な作品

中村芳中『光琳画譜』　享和2年刊　2冊　千葉市美術館 ラヴィッツ・コレクション
長斎編『山陰集』　寛政9年刊（中村芳中挿図）　1冊　大阪府立中之島図書館
巣兆編『徳万歳』　寛政12年刊（中村芳中挿図）　1冊　天理大学附属天理図書館
八千房(駝岳)編『大江丸追善』　文化2年刊（中村芳中挿図）　1冊　柿衞文庫
四方歌垣『住吉紀行』　文化8年刊（中村芳中挿図）　1冊　関西大学図書館



中村芳中『光琳画譜』より　千葉市美術館 ラヴィッツ・コレクション

巣兆編『徳万歳』（中村芳中挿図）　天理大学附属天理図書館

長斎編『山陰集』（中村芳中挿図）　大阪府立中之島図書館

※会期中、展示替があります。